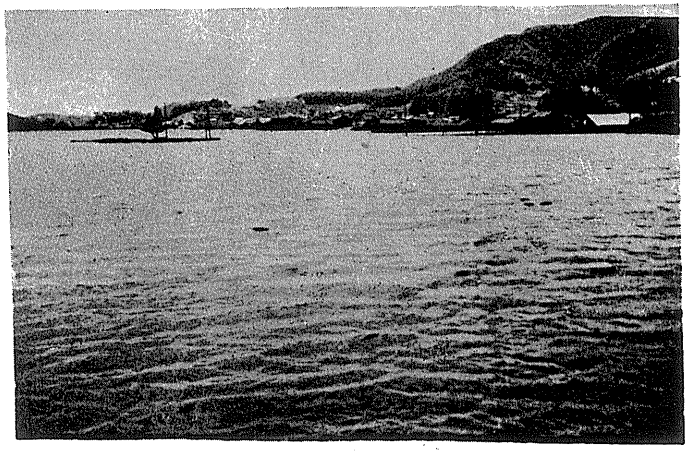
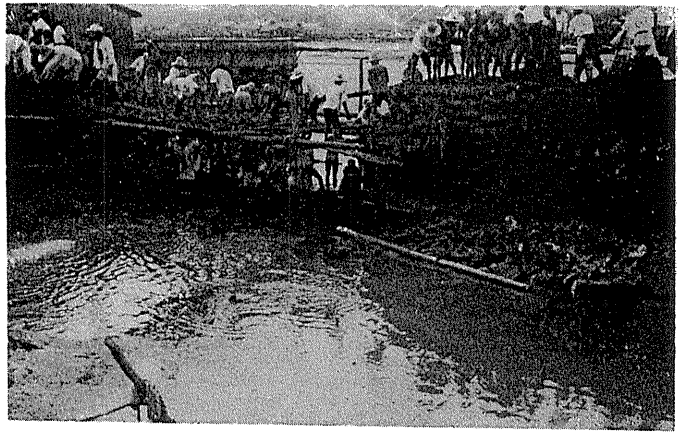
## 塩田復旧への協力

昭和一七年の秋、台風の為高潮が襲来して波止浜塩田の堤防が数ケ所切れた。戦時中のことで早急に復旧に取りかゝらねばならなかったが所によっては二度も三度も決潰して其の度に広くなり深くなって工事は困難となる。波止浜、波方の両青年団にも応援を求められた。場所は一六番浜、今のゴルフ場の傍で一度失敗した所で底は深く背も立たぬ程である。数日かゝって準備した土俵は一万を越したであろう。動員された日は十月の冷いしぐれが降っていた。青年は土俵運び、浜子たちは水中で、その土俵を次々と並べ重ねる。これには干潮の間の六時間という制約があるので、それまでに完了しなかったら駄目なのである。それで始めの間は、誰もが張り切って懸命にやったものである。大いに意気をあげてやっている中に雨は次第々々に強くなって、まだ十月中頃であるのに雨のはげしさは強く体の中に冷え込んでくる。その冷えと、しょぼぬれの中に青年達はいつの間に一人かへり、二人去っていった。指揮してる団長もこの猛雨に対して如何ともなし難い程であった。この時、波方（大字波方）の青年は頑張れよ、へこたれなよ、との



昭和17年の高潮で元の海と化した波止浜塩田島の如く見えるのは潮留さん、右上は高部部落





最後まで頑張つた波方青年団

声が力強く叫ばれていた。最後まで頑張り通したものは大字波方の青年団だけであったという。

やがて潮は足もとまで満ちて、積み重さねられた土俵に迫ってくる。さあ来た、もう大丈夫防げたと思った瞬間、中間の水もれのしたりから、アットいう間に潮はうなりをたてゝ塩田へ流れ込んだ。居並ぶもの、たゞぼう然として声もなかった。半日の労苦は一瞬でけし飛んだのであった。それにしても波方青年の最後までの頑張りこれは来島海賊の海に対する感覚と敢斗の精神が青年達の奥底に流れていたものであり、血は争えないことを深く感じた。その後もまた塩田の要請に応じて勤労奉仕に出かけた。

（以上青年団、青年学校に関する記事は連合青年団長、北郷青年学校長森友三郎の談話に依る所である）